

## E. 学習・研究環境の改善

## ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

## ●関西学院大学 文学研究科総合心理科学専攻

## 「国際化社会に貢献する心理科学実践家の養成」の事例 &lt;人社系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

海外での学会や研修に参加する大学院生に旅費・宿泊費・参加費等の支援を実施した。特に、国際学会に限らず、国外の大学・研究施設や実践現場に大学院生や教員を派遣し基礎や応用の実地調査を行うとともに、世界の第一線の研究者たちとの討議を行わせた。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

派遣に当たっては大学院生の自発的な活動を尊重し、相手の研究者や研究施設との交渉を大学院生自身が積極的に行い、教員はサイドで支援をするよう心がけた。さらに、定期的に国際学会・研修報告会を設け、海外での学術体験を総合心理科学専攻の全大学院生に報告させた。

## どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

国際学会で発表する場合には他にも経済的援助を受ける手段はあったが、研修や研究室単位の研究室間ワークショップ等への参加を補助する制度はなかった。本プログラムによりこれを支援できたことは非常に効果があった。RAが下級生を指導しつつコーディネイト役を務めたことも、指導する側・される側ともに良い刺激を与えた。海外研修先の受け入れはどれも積極的であり、世界で最先端と評価されている研究および臨床教育実践の状況を実地に体験することができた。また、報告会に参加した大学院生は、先輩後輩の報告によりグローバルな視点から自己の研究を位置づけることの重要性を学んだ。

## ●総合研究大学院大学 物理科学研究科機能分子科学専攻

## 「研究力と適性を磨くコース別教育プログラム」の事例 &lt;理工農系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

コース別教育における、海外研究室におけるインターンシップの支援、国内外での国際会議等出席に対する支援を行った。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

コースによっては、海外研究室で研修を行うことを修了要件とした。その期間は基盤機関で講義等を受けることができなくなるため、海外での研修を演習として単

位認定する制度設計を行った。海外での研修を支援した学生については、コースの修了要件として国際的な発表を他の学生に比して多く要求する等、支援の効果が表れる工夫を行った。

#### どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

海外研修を行った学生は、研修前に比べて、見違えるほど国際性を身につけて帰国する。共同研究とそれにかかる議論を通じて、先端的な学術を進めるためのコミュニケーション能力と視野の広さと人的なつながりを獲得し、大きく成長する。報告書の記述においても、今後の自らの方向性を定め、研究をより発展させていくために大きな力になったとの感想が多くみられる。この点は、海外研修のみならず、短期間の海外国際会議発表でも程度の差はあるものの、同様である。また、国際的な共同研究がより進むという効果もあった。

### ●九州大学 システム情報科学府電気電子工学専攻

#### 「5つの力をもつシンセシス型博士人材の育成」の事例 <理工農系>

##### 具体的に何を実施したのか

英語によるコミュニケーション能力を実践の場で試すために、国際研究集会での研究発表を行わせると共に、学生が主体となって企画・運営するワークショップ（WS）を開催した。

##### 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

国際的舞台における研究活動や研究成果の発信に欠かせない英語によるコミュニケーション能力や論文作成技術を習得させるため、非常勤講師による能力別授業ならびに海外のネイティブスピーカーを講師とするWebを利用した個別論文作成指導を行った。

##### どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

通常の研究活動だけでは身につけることが困難であった企画力や実行力を養成することができた。特に、プログラム実施期間に国際研究集会に派遣した学生数はのべ133名に達し、多くの学生に国際力の重要性を実体験を通じて強く認識させ、その習得に自発的に取り組もうとする意欲を喚起することができた。

## ●九州工業大学 工学府

## 「プロジェクト・リーダ型博士技術者の育成」の事例 &lt;理工農系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

本教育プログラムでは、専攻横断型の「開発プロジェクト」の推進のために、関連する海外の大学あるいは、海外の企業や研究機関等に短期派遣する制度を導入した。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

教育プログラムの特徴である早期修了という目標に障害にならない範囲で、諸外国等への学生派遣を積極的に推奨している。派遣期間は、原則1ヶ月程度とした。しかし、専門科目の履修や自らリーダを務める「開発プロジェクト」の推進に影響がない場合は、運営会議等の協議により、1ヶ月以上の派遣期間も許容している。それぞれの派遣費用は、全額教育プログラムから拠出している。

## どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

博士後期課程に進学しても、前期課程での海外派遣の経験が自信になったようで、「研究としても年に2-3回、国際学会にて英語で口頭発表を行っています」という感想を述べる学生がいる。グローバルな活動を行う人材が育っていることを実感できる。

## ●熊本大学 自然科学研究科

## 「イノベーション創出のための大学院教養教育」の事例 &lt;理工農系&gt;

## 具体的に何を実施したのか

国際会議・海外インターンシップへの派遣支援を組織的に行った。

博士後期課程の学生に対し、研究を提案させそれに対して研究経費を支給するという、自立支援事業を組織的に行った。

## 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

海外派遣事業では、一人あたりの支援回数の制限を設けて広く支援が行き渡るようにし、英語力により選抜を行った。

自立支援事業においては、研究の提案の経験を積ませるため、研究の提案書を作成させ、研究内容についてのヒヤリングをして選抜を行った。

大学院教養の講義科目履修を促す工夫として、いずれの事業の選抜においても、講義科目履修者を優先して支援する仕組みを設けた。

**どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか**

海外派遣事業・自立支援事業それぞれにおいて、成果報告書を提出させ、また成果発表の機会を設けた。海外派遣においては、高度な専門研究に接した刺激とともに、異文化に接することで自己を相対化する視点を獲得した様子がうかがえた。自立支援においては、研究の提案、資金の獲得、研究の遂行、結果報告という一連の流れを経験し、有意義な研究体験ができたように思われる。支援を受けた学生からは、いずれも有意義であったという感想を得ている。

**●久留米大学 医学研究科****「感染制御看護師（ICN）養成プログラム」の事例 <医療系>****具体的に何を実施したのか**

- ・ 国外の臨床におけるICT活動やICN活動、およびラボラトリー（WHO）の視察などのフィールドワークや、国立感染症情報センターでのFETP-Jの実地疫学研修に参加する機会を提供し、交通費及び宿泊費の支援を行った。
- ・ 大学院学生の学術集会における研究発表を推奨するために、感染制御・感染症看護・公衆衛生に関連する国内の学会もしくは国際学会に参加し、研究成果発表を行うための演題登録費用、交通費及び宿泊費の支援を行った。

**実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと**

- ・ 実地疫学で日本のスペシャリストである国立感染症情報センターでの研修を単位として認める「国際感染症看護実習Ⅰ」を設置し、全てが英語での講義であるため、事前にネイティブによる講義を開設した。
- ・ 研究の初学者ではあるが、国際学会での筆頭演者として口頭あるいはポスター発表を単位として認める「国際感染症看護実習Ⅱ」を設置し、大学院学生の学会発表を奨励した。これについても、事前にネイティブによるプレゼンテーションスキルの講義をお願いした。
- ・ 国内での長期実習や国外でのフィールドワークにおける効果的な学習環境整備のために、ノート型PCや携帯プリンターを購入し活用可能とした。

**どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか**

- ・ 国際学会での発表前後や国外でのフィールドワーク後の報告会を開催することで、大学院生人数は少数であるが、モチベーションの向上が見られた。国内でのICN養成コースであるプロフェッショナルコースにおいても、国際学会での研究成果の発表や、国外でのフィールドワークを希望する大学院生が増えてきた。また、英語での講義にも積極的に参加し、自信をもって英語で受け答えるなど、英語力の向上を認めている。

## 《非公表プログラムの事例》

### E. 学習・研究環境の改善

#### ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

##### ●事例 1

###### 具体的に何を実施したのか

2010年9月：本学博士後期課程の学生1名が、タイで開催された国際会議で研究成果を報告。

2011年3月：博士後期課程在籍の学生3名が、台湾の大学での研究交流および日本の人事院に相当する考試院でのヒアリング調査を実施。

###### 実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

学生の研究成果がきちんと理解されるような会議、交流になるよう配慮した。また、海外の高官と接することになるため、マナー等について学生に簡単なレクチャーを実施した。

###### どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

2010年9月の会議では、学生が英語で報告し、フロアからの様々な質疑にも応える経験をしたことで、海外での研究報告に自信を持つことができるようになったとのことである。

2011年3月の研究交流では、現地の大学院生、教員と議論を交わした経験、および、政府高官にインタビューした内容を、帰国後、各学生が研究報告としてその成果をまとめている。